

生への逃避行

少しばかりの胸苦しさをさえも
身にまとうことを拒んでしまい、また
それはいともたやすく許される

耐えきれぬ苦しきならば
毒抜きをしてから服用すればよく、また
逃げ道はいともたやすく見つけることができる

感性を養うためにさえ訓練を要し
拾い上げることは困難に近く
栽培するしかない

「私」の地平には怖れも、慰めも
魅惑も、また幻滅もなく
つまり、語るべき何ものもない

捜すなどは無駄骨に等しい、何故なら
結局それは造ることであり、則ち
既に「私」が地平に立っていることを意味するのだ

もしも私に今、出来ることがあるとすれば
恐らく、それは
棄てること、これひとつだろう

それは恐ろしいことだった
棄てること
これ以上に今の私にとって恐ろしいものはない

考えただけで鳥肌が立つその言葉
ああ、何故そうまでしなければ
地平は生命を持たないのだろうか

生活から転がり落ちさえすればいいのだ
ちょっと遠くへ逃げればいいだけなのだ
そうすれば誰も追いつけないのだ
永久に戻らないことも可能なのだ
そうすれば己を生きることができなのだ

生きることができるのだ

(1990.7.14)